

# 世界語り継ぎフォーラム セッションサマリー

# セッション1: 語り継ぎとミュージアムを 考える(津波・水害)

コーディネーター: 立木茂雄、マリー-ポール・ユングブルート

発表者: ドナ・サイキ、竹田彰  
デービット・N・サトラー、ラマダニ  
リア・ゲルーク、カレン・リーゼム

# セッション1： 語り継ぎとミュージアムを考える(津波・水害)



写真：表ほか

# 6つの発表に共通する点

## 博物館の有する3つの基本的機能（ICOM）

1. 収集と保存
2. 調査・研究
3. 有形・無形（語り継ぎを含む）物の展示

## 災害体験と防災教育

1. 水に関連する災害
2. 災害因（ハザード）の理解
3. 被害が起こらないようにする事前の備えや、発災後の被害をできるだけ軽減するための備えに関する防災教育の推進

# 6つの発表の違い(特異性)を決める2つの要因

## 「記憶の場」の性質

1. 体験がまだ生々しく、それ故に「過去が現在とつながっている(レトロスペクティブな)」記憶  
タイ、スリランカ、インドネシア(2004), ルイジアナ (2005)
2. 時間を経た故に、「現在が未来(の災害)とつながっている(プロスペクティブな)」記憶  
ハワイ (1946, 1960), オランダ(1953), 奥尻 (1993)

## 物語りの性質

1. 一人ひとりの物語りの重視  
タイ、スリランカ (2004), ハワイ(1946, 1960), オランダ(1953)
2. 制度化された物語りの重視  
インドネシア(2004), ルイジアナ (2005), 奥尻 (1993)

## セッション2: 語り継ぎと防災を考える

コーディネーター: 牧 紀男、リチャード・アイズナー

発表者: アモッド・マニ・ディクシット

顧林生

ジツラリ・ベヌーアール

阪本真由美

定池祐季

## セッション2：語り継ぎと防災を考える



写真：表ほか

# 議論の内容

1. 語り継ぎは総合的な防災対策の中で重要な要素の一つであるが、それだけで完結するものではない。
2. 災害体験は貴重なものであり世界遺産である。
3. 災害を学ぶ教材として、過去の教訓や他の地域の教訓も重要である。
4. 持ち運び可能な事が有効である: 移動博物館、語り部
5. 災害の経験は失われやすいものであり、語り継ぎや博物館は重要である。
6. 被災体験を持つ人々が、客観的な観点から災害経験を継承する研究者・語り部となることができる。

# 今後の課題

1. 他の地域に災害体験を伝える際には文化・社会的背景の違いを踏まえる必要がある。
2. 災害経験については様々な立場や意見が存在することが重要である。
3. 特にハザード情報については、情報の質を確保した上で伝達する機関が必要である。
4. 語り継ぎと防災教育のための新たな社会科学の枠組みやマーケティングに関する研究が必要である。

# セッション3：語り継ぎとメディアを考える

コーディネーター：安富信、磯辺康子

発表：ジェド・ホーン、スベンドリーニ・カクチ、住田功一、磯辺康子、阿久沢悦子、野田武、杉村奈々子、森川暁子、魚住由紀、日比野純一

### セッション3: 語り継ぎとメディアを考える



写真:表ほか

# 意見と提言

## 【ハリケーン・カトリーナの経験から】

- ニューオーリンズは、地形的に災害に対する脆弱性があり、堤防に工学的な欠陥があった。
- 被災地には情報が欠如していた。
- 災害に対する脆弱性は収入などの階層ごとに異なっていた。低所得層は特に脆弱だった。
- ジャーナリストにとって重要なのは、だれが最も弱い被災者であるかを認識することだ。

## 【インド洋津波の経験から】

- 被災者は津波がどういうものかを知らなかった。
- 津波警報システムがあれば、被災者は避難することができた。
- コミュニティーにとって重要なのは津波が何であるかを知ることであり、女性が重要な役割を果たす。
- メディアはコミュニティーのメンバーであり、情報を提供することによって津波に対する住民の恐怖をぬぐい去る努力をしなければならない。

## 【阪神・淡路大震災とそのほかの日本の災害の経験から】

- 被災者に向け、被災者のためになる、被災者を支援するラジオ番組を阪神・淡路大震災以後続けている。国内外の災害の状況や、防災の知識を伝えている。この番組は、被災地同士、被災地と被災地外を結びつける役割を果たしている。
- 阪神・淡路大震災後、多言語のコミュニティーFMを立ち上げた。関東大震災の経験から、在日韓国・朝鮮人に対する流言飛語を防ぎたかった。現在、地域の人々のさまざまな防災活動も行っている。
- インドネシアなどでも、コミュニティーラジオが防災に関して重要な役割を果たしている。

## 【阪神・淡路大震災とそのほかの日本の災害の経験から】

- ジャーナリストとしての悩み。語り継ぎをしていくことと、災害の悲劇を記事のネタとして消費していくことのギャップがある。
- 災害発生日の周辺に記事が集中する「記念日報道」の問題点がある。
- 「遠くなってしまった災害」を身近に感じてもらえる分かりやすい記事が必要。
- 被災者が伝えたいことと、被災していない人が知りたい情報にギャップがある。
- 震災を知らない若い世代に伝わるような記事を書くことが大切。メディアは、若い日本人々の防災活動を取り上げることで、彼らのモチベーションを上げるという役割もある。
- メディアの中でも、震災を経験した記者としていない記者の間にギャップがある。
- 被災者の中には、メディアの取材には応じなくても、防災教育の一環で話を聞きに来た子どもたちには語ってもいい、という人がいる。こうしたことは、メディアとは異なる形の語り継ぎの可能性を秘めている。
- 被災地の取材に行く記者は、もっと事前のトレーニングが必要。
- このセッションのタイトルは「語り継ぎ“と”メディア」となっているが、「語り継ぎをする者としてのメディア」「コミュニティー・サービスとしてのメディア」について考えていくことが重要だろう。

# セッション4：語り継ぎとミュージアムを考える (地震、火山ーその1)

コーディネーター：深澤良信、アレサンドロ・パースト  
発表：山本健一、劉華彬、リチャード・ブランディ、  
ビルジ・ディクメン、ジョバンニ・トサッティ、  
三松三朗、河本富士雄

## セッション4：語り継ぎとミュージアムを考える（地震、火山-その1）



写真：表ほか

# サマリー

- サンフランシスコ市内のあちこちに残る1906年震災の仮設住宅の再発見が、防災意識の高揚につながっている(サンフランシスコ)
- 四川大地震で人々が自然の脅威にどのように対処したかを目撃した証人として、被災地全体を保存する(四川大地震)
- 痛みは分かち合うことによって癒される:このことを忘れないよう、トレーニングや情報発信をおこなう(トルコ・マルマラ地震)
- 人災の現場の保存、情報発信、類似の災害の被災地との連帯の形成などにより、さらなる過ちを繰り返さないようにする(スタバ渓谷尾鉦ダム崩壊)
- 地域にとっての火山の功罪の両面を考慮し、火山と共生していくことが重要である(有珠山噴火)
- 屋外のフィールド・ミュージアムは、実物に触れることにより災害についての認識のレベルが上がる、地域の人々とのふれあいが深まるなどの効果がある(雲仙岳噴火)
- ユネスコのジオパークの認定などにより、語り継ぎの取り組みの認知度が高まる(有珠、雲仙)
- 展示だけでなく、災害関係資料に関して大学と連携したり、被災地内に散在する鎮魂モニュメントなどのマップを提供するなど、総合的な取り組みを実施している(人と防災未来センター)

# 語り継ぎの意義、その他

## 語り継ぎの効果

- 長いプロセスを経て、災害の事を忘れたいと願う地域住民が、大切な教訓を伝える媒体となることを誇りに思うようになるなどの意識変革
- 2000年の火山噴火の際には地域住民の全員が避難して犠牲者が一人も出さずにすんだ
- ミュージアムを訪れる事が、学校での防災教育を始めるきっかけになる場合も多い
- 被災地を文化遺産として保存することにより、人間が自然とどう対処したかを示すことは、我々の責任である

## 行政などへの働きかけ

- 行政や都市計画関係者、災害対策関係者と対峙し、地域への敬意をもって適切な土地利用政策を実行させるように働きかけるべき
- ジオパークの認定にあたっては、それが観光資源の開発にも繋がるとの認識を共有し、首長も巻き込んだ活動を行うことができた

## 語り継ぎの強化に向けて

- 経費のかからない語り継ぎの良い事例を示すことが効果的
- 災害の語り継ぎは、心に訴えるだけでなく、科学的にも正確な情報となるようにすることが重要

# セッション5 語り継ぎと交流を考える

『誰が、誰に対して、何を  
何のために、どのように語るのか』  
『語り継ぎの意義とは何か？』

(コーディネーター)

近藤民代

(発表者)

ティン・エイ・エイ・コ

永田宏和、イカプトラ

河合節二、チャールズ・アレン

吉椿雅道

## セッション5: 語り継ぎと交流を考える



写真: 表ほか

- 多くの家族が参加してくれる, 楽しみながらできる(How) 災害対応訓練(永田宏和)
- イベントそのものを表面的に伝えるのではなく、イベントが形作られるプロセスを伝える(What)(永田宏和)
- 地域性に合わせた持続可能な(How)防災教育をしていくことが大切→その過程で戦略的に語り継ぐ担い手(By Whom)を積極的に増やしていく(永田宏和+イカプトラ)
- 私たちに語ることがあるのではなく、語り継いでいくことを教えてくれたのは被災者であり, 未来を担う子供たち(To Whom)に伝える(永田宏和+イカプトラ)
- いのちを守ること(What)だけではなく、被災直後の人間模様、何が起こっていたか(What)を絵本やアニメを通して伝える(How)(永田宏和)

- 復興の過程での合意形成の過程の知恵を欲している  
(What) (チャールズ・アレン)
- 合意形成には時間をかけて説明していくことが大切だ  
(What) (河合節二)
- 神戸の震災で学んだ「助け合い」と「ボランティア」精神を生かしながら、子供たちに対して (For Whom), 人と人のつながりを強めながら、自分たちの救援活動と教育環境整備を通じて (How) 語り継いでいく (ティン・エイ・エイ・コ)
- 一方的に伝えるだけでなく、地域の暮らしや文化を理解して、地元のローカルノリッジを掘り起こす (吉椿雅道)
- 被災地での救援活動を積み重ねていく中で、多くのことを被災地で学ばせてもらい、それを次の被災地に伝えている (What)。支援する側、支援される側という関係ではなく、寄り添いながら (How)、被災地が次の被災地を順繰りに支えていくことが大切 (吉椿雅道)

# セッション6：語り継ぎとミュージアムを考える (地震・火山ーその2)

コーディネーター：

諏訪清二、船木伸江、カレン・T・リーゼム

発表：丸山篤、呉徳棋、ミカエル・G・メルクムヤン、  
関俊明、ルイス・ロベルト・ヘルナンデス・オズ  
グエダ、杉本伸一

## 語り継ぎとミュージアムを考える(地震・火山ーその2)



**丸山篤, 稲むらの火の館 館長(安政南海地震津波,1854):**濱口梧陵の功績を讃えるために建設された施設であり、特に、津波の歴史を知ってもらうこと、津波からの被害を軽減することに力を入れている。津波に対応するために、自助、共助、公助を整備すべきである。

**呉徳棋,台湾921博物館 館長(台湾集集地震,1999):**建物の安全性を乾燥麺を使って説明したり、非常持ち出し袋を作るプログラムなど、災害への備えの効果と重要性を多方面からの実践的な体験を通じて学ぶことができる施設である。

**ミカエル・メルクムヤン,アルメニア・アメリカン大学工学部研究教授(スピタク地震,1988):**この博物館は、たくさんの地震の資料を収集し、特に次世代の子どもたちのために保存することを目的としている。博物館で収集した資料は、周辺の国々のためにも防災教育のコンテンツを提供している。

**関俊明,群馬県嬭恋村立東小学校教諭(浅間山噴火災害,1783) :**関先生は、火山噴火について人々に伝えるために、噴火で被害を受けた場所を発掘調査し、遺跡発掘現場を日本のポンペイにする活動と展開しようとしている。

ルイス・ヘルナンデス, サンタテクラ市助役(エルサルバドル地震, 2001): この5年間、サンタテクラ市では市政機関のための危機管理会議を開催している。この会議は、2001年の地震による被災者の慰霊を目的としており、災害の備えの文化を促進させることや政治家への情報提供なども併せて行っている。

杉本伸一, 島原半島ジオパーク事務局長(雲仙普賢岳噴火, 1991): アウトドア博物館であるジオパークは、地域だけでなく他地域や国外の人たち、時代の人たちに火山噴火の教訓を伝えることを目的として設立されました。火山災害の仕組みと共に、火山からの恵み(温泉や豊かな土壌など)も併せて教えることで火山と共に生きることを人々に伝えている。

セッションを通じて、人の心の中、地域の中、博物館の中に災害により語り継いでおくべき記録、記憶がたくさんあることがわかった。これからは、地域の中にある記録や記憶をどう教育に生かすのか？博物館の中にある記録や記憶をどう災害文化にするかを考える必要がある。